

---

# Fate/lion night

伊佐未勇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e / l i o n   n i g h t

### 【Nコード】

N 8 1 1 9 P

### 【作者名】

伊佐未勇

### 【あらすじ】

F a t eの世界にFF8の主人公であるスコール・レオンハートを介入させてみた話です。

彼はなぜ英霊になったのか？彼は英霊になり何を成すのか？

一体彼はどんな結末を迎えるのか？

彼の物語は始まったばかり・・・

## プロローグ（前書き）

パソコン復活記念作品です。

FFとFateが好き過ぎてやってしまいました。  
今回は、プロローグです。

## プロローグ

これは、もしもの話。

トが

もしFF8の主人公である、スコール・レオンハ―

F a t e / s t a y   n i g h t に介入したら一体  
どうなるんでしょうか？

まあ、私の出番はここで終了しますが・・・

これだけは、皆さんに伝えておきます。

「彼をよろしく願います」

私たちの種「SEED」を・・・

さあ、彼の物語の始まりです。

ここはどこだ・・・

リノアは、みんなは・・・

俺は、一体どうしたって言うんだ

くそっ、思い出せない

汝、聖杯を欲するものか？

なんだ、頭の中に声が、もしかしてラグナか？

否、我は此処の主だ

主？聖杯？一体何いつてんだ。  
とりあえずは、落ち着いて話を聞くことが  
先決か。

「ここはどこだ？」

「英霊の座だ」

「英霊？」

「英霊とは、生前に偉業を成し遂げた者を言っ」

偉業？待てそれより生前って俺は死んだのか・・・  
じゃあ、皆はどうなったんだ？

俺は、皆を守れたのか？  
いや、守れなかったんだろっな・・・

「で、あんたは俺に何のようだ？」

「お前には、聖杯を巡って英霊たちと戦ってもらっ。

俺の他にもいるのか？

「聖杯とは何だ？」

「願いが叶うものだ」

そんなお伽噺みたいな物があると思って、  
今の俺がお伽噺だな・・・

願いなんて特にないんだが、  
仕方ないか・・・

「俺はその戦いに参加すればいいのか？」

「そうだ」

「なら早くしてくれ」

「さあ、行くが良い獅子よ」

## プロローグ（後書き）

後悔はしていない!!!

この小説は、3日に一話は更新していくつもりです

## 召喚（前書き）

ついにスコールが英霊として召喚されます

## 召喚

「うん・・・此処は？」

周りに椅子やらテーブルやらが散乱している。  
どうやら、落ちたようだな。

召喚というのはこんなに荒っぽいものなのか

「貴方が私のサーヴァント？」

サーヴァント？ああ、英霊のことか

「そうだ」

「貴方のクラスは？」

クラス？なんだそれは？  
うっ、頭に情報が・・・

「・・・・・・・・」

「どうしたの？」

「いや、俺のクラスはガンブレードだ」

「はあ？ガンブレード？何そのクラス？」

目の前の少女が胸倉を掴んで来た。

「放せ、少し苦しい」

「あつ、ごめん」

目の前の少女が顔を少し赤くして一歩下がった

「そういえば、君の名は？」

「私？遠坂 凜よ」

それからは、自己紹介などをし合った  
凜が真名を聞いてきたので・・・

「スコール・レオンハートだ。

できればクラスよりスコールと呼んでくれ」

「そうね、貴方のクラスはロゴが悪いからね」

悪かったな・・・

スコールは心の中でこう言った

## 召喚（後書き）

次回からは、  
ついに英霊たちとの戦いが  
始まります。

## ミッションスタート（前書き）

今回は、あのサーヴァントが……！！

## ミッションスタート

昨日は疲れるようなことばかりだった・・・

さて、今日からこの世界での生活が始まるわけだが  
とりあえず、今の自分の状態を確認したほうが良いな

「・・・・・・・・・・」

英霊になる前と特に変化なしか。

凜は何処に行ったかな？

リビングに行くとき紅茶を飲んでいる凜がいた

「おはよう、スコール」

「ああ、おはよう」

「いきなりで悪いんだけど今夜、私の学校を調査をし  
に行こうと思うんだけど」

なんでいちいち俺に聞いて来るんだ、それくらい自

決めるよ。

分で

いままでの経験上こんなことを言ってしまうと面倒な  
ことになるのは分かっていたので

「分かった、時間になったら呼んでくれ」

「分かったわ」

〽夜・学校〽

「ここになにかあるのか？」

凜に連れられやって来たのはいいが俺はそんなに魔力がないので凜が何をやっているかはさっぱりだ。

「こんなところにまで・・・」

凜が何か言っているが俺には関係ない、俺の任務は凜を守りきることだけだ。

「こんなところにまで来てご苦労なこつたねえ」

「貴様、何者だ」

「貴様こそ」

と青い男が言った瞬間、いきなり槍で切りかかって

きた

「スクール！！！」

なんでこんな時に出て来るんだよ・・・

「ちっ、凜退くぞ」

そう言っ て凜を抱え屋上から校庭へ飛び降りた  
だが、あいつは俺より先に校庭に飛び降りていた

「鬼ごっこは終わりかい？」

「そうだな・・・」

俺は、凜の方を見た。

凜は俺の考えを理解して

「行きなさい、スクール！」

「了解」

## ミッションスタート（後書き）

今回は、ついにサーヴァント同士の戦いが始まります

## 剣の騎士（前書き）

あけましておめでとうございます！！！！

2011年もよろしく願います！！！！

今回は、あの剣の騎士が。

## 剣の騎士

いる。

体した

る。

俺は今、槍を持った青い男と戦いを繰り広げて男の手には槍が、そして俺の手には銃と剣が合物、「ガンブレード」と言う武器が握られてい

「貴様、どこの英霊だ？」

何処の英霊でもいいだろ・・・

しかし、凜の話では自分の情報を相手に漏れる

自分を不利にするらしい。

ならば、自分のことを言う必要はない。

「さあな」

俺は槍を弾きながらそう言った。

「俺のクラスはランサーだ。貴様も名乗れよ」

もう面倒だな・・・

「ガンブレードだ」

「はあ？そんなクラスは存在しねえよ！」

のは

た。

事実なんだからしょうがないだろ。  
そんなことを考えていると、辺りに人影が見え

「ちつ、決着は後回しだ」

ランサーは、人影を追いかけて行った。  
そうすると凜が近寄って来た。

って

「なんでこんな時間に人が・・・スコール後を追

じゃ

魔術師は、非常にならなければいけなかったん

なっかたか？

まあ、マスターの命令だから逆らえないか・・・

「・・・了解」

ランサーの後を追っていったのはいいのだが・・・

一人の少年が血まみれで倒れていた。

間に合わなかったというわけか・・・

しかし、俺にもまだ出来ることがあるか・・・

そして、俺は少年に近よった。

これは、呪いによる攻撃か？

少し、面倒だな。

「エスナ」

俺は、まずエスナと言う魔法を使った。  
効果は、身体異常を直すことが出来る魔法だ。  
俺は、誰に説明してるんだよ。

これで、呪いはなくなったみたいだな。  
なら、次は・・・

「アレイズ」

少年の顔に血の気が戻ったみたいだ。  
そんなことをしているうちに凜が後から来て

「衛宮君！？」

どうやら知り合いのようだな。  
俺には関係ないか。

「大丈夫だ、生き返らせておいた」

凜は驚愕している。  
そんなにすごいことなのか？

「貴方・・・まあいいわ、それよりここから離れ

ましょう。」

〈帰り道〉

凜は何か考えていた。

ったのだが

それに対し俺も黙っていたので静かな帰り道だ

ばランサーは

「そういえば凜、あの少年が生き返ったとなれ  
黙っていないんじゃないのか？」

俺がそう言った後、凜の表情が一瞬固まり

「そうだった！早く衛宮君の家へ」

その場を

おいおい、しつかりしろよとも言えず俺たちは  
後にした。

↓衛宮低・前↓

が見えた。

俺たちがつくと同時に、ランサーが出て行くの

きた。

次の瞬間、何者かが俺に向かって斬りかかって

「はあっ」

「ちっ」

ないのは

何とか、それを防いだものの相手の得物が見え  
不利だなどと考えていると

「やめろ、セイバー」

と、さっき助けた少年が家の中から出てきた。

## 剣の騎士（後書き）

この小説を読んでいる人たちにありがとうございます

いきなりで、すみません。

スコールは、誰と恋愛をすればいいか。

アンケートを取りたいと思います。

皆さんのご協力お願いします。

狂戦士（前書き）

今回はあの方が!!!!!!!!!!

F a t e / l i o n n i g h t

始まります。

狂戦士

「衛宮低」

「止めろ、セイバー」

少年がそう言うのとセイバーと呼ばれた少女は動きを止め

納得のいかないような顔をして

「何故です！？彼らはマスターとサーヴァントなんですよ」

そんなやり取りを見ていると、後ろにいた凜が俺の前に

歩み出て少年にこう言った。

「こんばんは、衛宮くん」

「えっ？遠坂・・・」

衛宮は、心底驚いたような顔をしていた。もうちょっと感情は顔に出すなよ・・・。

「ねえ、ここは寒いし中で話さない？」

おいおい、敵なんだぞ・・・そう簡単に話なんて出

ないだろう・・・

「ああ、そうだな」

もう何もいわないさ・・・

この時、俺はどんな顔をしていたのだろう。

きつと、呆れてたんだろうな。

衛宮を先頭に俺たちは、衛宮の家へと入っていつ

た。

く居間く

「へえく、なかなかシユールねえ」

凜が興味深々で部屋を見ている。

これが和風と言うのだろうか、俺の時代にはなか

詳しくは分からないな。

ったから

「で、話って言うのはなんだ？」

今までの様子と違う感じで衛宮の前に座った。

そうして始まったのは、話し合いではなく説教だ

った。

「貴方は、マスターなのこれはどう言う事が分か

るわよね？」

衛宮は当然のように首を横に振った

「あんた、聖杯戦争って知ってる？」

どんどん口調が変わってきているがあえて言わな

それに対し衛宮はまた首を横に振った。

凜は、怒りを通り越して呆れている。

「もういいわ、私が大まかな事だけ説明してあげる」

そうして、1時間にも及ぶ説明が始まった。

その間、俺は衛宮に家を見て回っていいか許可を

求めたら

「ああ、いいぞ」

と返って来たので見て回っているわけなのだが・

当然のように監視役がついていた。

「話は聞かなくてもいいのか？」

「知っていることを聞いても無意味です。」

「そうか・・・」

これっきり会話が途切れ1時間が過ぎた・・・  
居間に戻ると二人とも友達のように雑談をしてい

た。

敵同士じゃなかったのかよ・・・

「スコール、今から言峰教会に行くわよ」

〈言峰教会〉

「じゃあ、スコールはここで待っててね」

「ああ」

「セイバーも待っててくれ」

そして、俺とセイバーを置いて二人は言峰教会に

入って行った。

隣のセイバーは不機嫌そうに立っていた。

「不機嫌そうだな？」

そう言うと、セイバーは俺を睨んで来た。  
なんだよ、俺何か悪いこと言ったか？

「貴方には関係ないことです。」

冷たく返された。

ああ、そうか俺たちは敵同士だったな・・・  
凜の悪い癖がうつったか。

「悪かったな・・・」

これで会話も終わりかと思つたら

たね。  
」

「そういえば、貴方の名前を伺っていませんでし

それは、言う必要があるのか。

まあ、名前ぐらいはいいか。

「・・・スコール・レオンハートだ」

そう言うときセイバーの周りの緊張感がなくなり。

「レオンハートいい名だ」

名前で判断される俺って何なんだ。

それっきり向こうも黙り込んでしまった。

しばし沈黙の時間が過ぎ、二人が出てきた。

「お待たせ、スコール」

そういつて凜が俺の前まで来た。

衛宮はセイバーの方に行き、握手をしていた。

四人で道を歩いて、ちょうど分かれ道。

衛宮とセイバーと分かれる道。

「士郎、これからは敵同士なんだからね」

月明かりの下、衛宮は

「俺、お前と戦う気なんてないぞ」

まあ、予想していた答えと同じだったので驚きはしなかったが。

そろそろ、頭にきた。

「じゃあ、お前は誰となら戦うんだ！」

突然出した大声に凜を始め、衛宮、セイバーも驚いている。

そろそろ、限界だったのだ。

「それは・・・」

衛宮は口ごもっている。

それに追い討ちをかけるように俺は言ってやった。

「お前は恐れているんだ！死ぬことを、相手を殺すことをな！」

お前はただの臆病者だ！！！」

それを衛宮の後ろで聞いていたセイバーが衛宮を守るように前に出てきて。

「士郎への侮辱は私が許しません！」

それと同時に衛宮が話し始めた。

「俺は、相手を傷つける以前に話し合いで解決できると思う。」

それがもし駄目だったとしたら、俺は戦う。」

やはり、この男は考えが甘すぎる。

このままだったらずくに殺されてしまう。

か？

「それは、こちらからは手を出さないということ

話し合いで解決？ふざけるな！！！！

戦いはそんなに甘いものではない！！！！」

と戦う！」

「そうは言っていない、戦うときになったらちゃん

それじゃ、駄目なんだよ衛宮・・・

戦いへの覚悟がまるでない。

ちっ

「だから、いいかげんにしなさい！！！！」・・・

凜が俺と士郎の間に入ってきた。

「落ち着きなさいスコール、いつもの貴方らしく

ないわよ。」

いつもの俺ってあんたに何が分かるんだよ・・・  
もう、今の大声で頭が冷めたな・・・

「ねえ、もうお話は終わった？」

「「「「！！！！！！！！」」」」

その場にいた全員が固まった

なんだ、この殺気は？

周りの墓場の雰囲気が生み出している空気なのか？  
いや、違うこれは

声の主は巨大な何かに乗っていた。

「貴方は一体？」

まず始めに口を開いたのは凜だった。  
その問いに相手は、余裕を出しながら

「貴方には分かるはずよ凜。

私は、イリヤスフィール・フォン・アインツベ

ルンよ」

「アインツベルンてまさか！」

「じゃあ、殺すね。行けバーサーカー！」

## 狂戦士（後書き）

なんか、ぐだぐだになって来ました。

こんな、駄作を読んでくれてありがとうございます。

意見やアドバイスがありましたらお願いします。

覚醒！？（前書き）

今回はアノ人が覚醒！？しちゃうかも

それではF a t e / l i o n   n i g h t

始まります！！！！

覚醒！？

「じゃあ、殺すね」

てきた。

いる大き

目の前の少女がまるで死刑宣告のようなことを言っ  
それと同時に大きな岩を砕いたようなものを持って  
なサーヴァントが俺たちに向かって来た。

「スコールお願い！！」

おいおい、あれに立ち向かえって？

・・・無理だろ・・・

まあ、仕方ない。マスターの命令は絶対か・・・

俺は覚悟を決め

「了解！！！」

そう言うつと、俺は手にガンブレードを出現させた。

そして、瞬時に自らの物理防御力を高める魔法「プ

ロテス」

を唱えた。

これなら少しはマシか・・・

「・・・・・・・・！！！」

「ちっ、理性が吹っ飛んでるのか！」

攻撃して

目の前のサーヴァントは、反撃を恐れることもなくきた。

俺はそれをガンブレードで受け止めた。

その瞬間！！！！

「ぐううつつ・・・」

なんだ！？この力は？

相手の攻撃を受け止めた瞬間に俺の体は10mほど

離れた電柱に

叩き付けられた。

「スコール！？」

「あはははは、馬鹿ね勝てるわけじゃないじゃない」

少女は気分良く笑っていた。

「バーサーカーはギリシャ最強の英雄なんだから」

ギリシャ？と言うのは分からないが・・・

最強の英雄に勝てるのかよ

それを聞いた凜は驚いていたが・・・

勝てるわけ無いと決め付けられるのは納得いかない

な。

「・・・ぐつ」

俺は、ガンブレードを杖代わりにして立ち上がった。

「なんで？勝てないのに・・・なんで？」

不思議か？そうだな俺だつて不思議だよ・

意地なのか？誇りなのか？

分からないな

だが、ただ一つ言える事は・・・

「誇りを・・・意地を・・・自分の存在・・・そして凜を守るためだ！！！」

そう言つと、俺の体が輝きだした・・・

「うっそ、何これ！？」

これは元の力が戻っていくのか。  
徐々に光は弱まっていった。

「獅子の心を！！！」

そう言つと手に持っていた武器がリボルバーから  
俺の最強の剣・ライオンハートに変わっていた。

「ふん、なによそんなのやっちやえバーサーカー！」

「！！」

た。

そう少女が言つとバーサーカーは俺に向かって来た。  
それと同時に目の前に剣の騎士がすごい速度で現れ

「はあっ！！！」

ていた。

セイバーは、バーサーカーの攻撃を軽々と受け止め  
凜と衛宮が近寄ってきた。

「そんなボロボロなのに、なにカッコつけてんのよ」

「凜・・・」

「俺たちもいるんだぞ」

「衛宮・・・」

こう言うのは漫画でしか見たことは無かったけど。  
実際にあるとはな・・・  
しかし、悪い気はしないな

「むう」

少女はバツの悪そうな顔をしている。

「なんかつまんない。もう帰る」

帰るとは見逃してくれると言うことか・・・

ここまで追い詰めておきながら見逃す意図は分から

ないが

「次は殺すからね」

消えていった

そういうとバーサーカーは少女を肩に乗せ闇の中に

「・・・行っただか？」

ど助かったわ」

「見逃したと言うことかしら？意図は分からないけ

凜も分からなかったか

凜はあの少女と知り合いだったからなにか分かると

思っただが

「で、あなたのその力はなに？」

いきなりか・・・

それより凜が近い。

前髪があたるくらい近い。

あれ？

目の前が・・・

「・・・くっ・・・」

目が霞む。

「ちよつと、大丈夫！？」

ごめん、大声は頭に響く。

今は眠らせてくれ・・・

「大・・・丈夫・・・だ」

その言葉を最後に俺の意識は飛んだ・・・

**覚醒！？（後書き）**

なんか、バトル漫画のクライマックスのような  
感じになってしまいましたねえ。

えっ、これで終わり？展開速すぎ？

大丈夫、これは原作から少しはんします。

もう冬休みも終わりなので、更新遅れるかも  
知れないです。

出来るだけ早く更新するのでよろしくお願いします。

## 同盟（前書き）

時間が空いちゃいましたねすいません・・・

今回は、「同盟」です。

始まります。

「私、怖いよ・・・」

なんだ？

「私は魔女、スコールはSEED」

・・・魔女？

「SEEDは魔女を倒す」

これは・・・過去？

「そうこれは貴方の過去よ」

辺りは暗闇に包まれている・・・

「誰だ！？」

俺が問いかけても返事はなし・・・

「・・・接続が・切れ・・・る」

「待つてくれ！！！」

そこで俺の目が覚めた

「衛宮低」

「うつ・・・」

強い光が俺の目に入って来た。  
どうやら目が覚めたようだ。

「さあ、どう言う事が説明できるかしら？」

目を覚ました瞬間、アカイアクマが目の前にいた。  
いきなりか・・・

「・・・元の力が戻っただけだ」

説明といってもこう言うしかないよな。  
まあ、相手は納得言っていないみたいだな。

「それは説明？」

凛の後ろに何か黒いオーラが見えるような気がする・・・

これは俺が危ないんじゃないのか？

「遠坂、落ち着けよ」

衛宮からの助け舟が出た。

「私は落ち着いてるわよ！」

それか？

そう思ったのは俺だけではなかったようだ。

「それで？衛宮と手を組んだのか？」

話をそらしてみた。

「えっ、うん」

凜は、バツが悪そうに言った。

凜もお人好しだなと思ったのは凜には言えない。

「そうか、まあそれもいいだろう」

衛宮が台所から出てきて俺たちの前に座った。

「スコール、お前は本当に良いのか？」

衛宮は真剣な目をして聞いてきた。

そんな本気になるなよ・・・

良いって言っただろ。

「かまわないさ」

前に言ったことを気にしているんだろうか？

「ところで、セイバーは？」

「ああ、多分道場にいると思うぞ」

そう聞くと凜がなにやら微笑んで俺を見てきた。

なんだよ・・・

「なんだよ？」

そう聞くと凜が意地の悪そうに

「あらあら、スコール、セイバーに何か用なの？」

何を期待しているんだ・・・  
まったく

「そんなんじゃない」

俺はその言葉を言い、居間を後にした

↓  
道場  
↓

俺が道場に行くとセイバーが片隅で正座をしていた。  
俺は、そこに近寄って行った。

「何か用ですか？」

姿勢を変えずにそういつてきた。  
以前より言葉が優しくなったな

「いや、今日から同盟を組むんだ挨拶をな」

そう言うと、セイバーは立ち上がり

いけないと

「同盟を組むからには互いの力を知っておかなければ  
思います」

「・・・」

「私と勝負をしてください」

何でこうなるんだ・・・  
こうして戦いが始まった・・・

## 同盟（後書き）

結局、同盟ですね。

次回は、スコール対セイバーです。

スコールの実力はいかに・・・

## 模擬戦（前書き）

今回は、スコール対セイバー！！！！

遂に獅子対獅子の対決が始まります！！！！

それでは「模擬戦」が始まります。

## 模擬戦

俺は、今セイバーと向かい合っている。  
何故かって？・・・戦うからさ・・・

「準備はいいですか？」

セイバーは本気モードだ。

それにしても、フル装備とは・・・  
やるしかないのか。

俺はそう思いながら、手にライオンハートを出現させた。

「ああ・・・」

「それでは、いきますよ」

その言葉を引き金に戦いは始まった。

まずは、セイバーが真っ直ぐに突っ込んできた。

俺もそれに反応し、セイバーに切りかかった。

そうすると、つばぜり合いになった。

この細身でこんな力が出せるのか！？

俺は、内心驚きつつ距離をとった。

「サンダガ！！！」

俺が、電撃系の魔法を放つも・・・セイバーは無傷！

それから、「ファイガ」（火炎系魔法）「ブリザガ」

！！

（氷結系魔法）

を放つも、結果は変わらず。

「魔法がきかないだっ！？」

「終わりですか？ならこちらの番です！」

そう言うのと、セイバーが俺に向かって切りかかってくる。

最初と同じように対処するも、セイバーの剣技が凄過ぎて防ぐので

精一杯になってしまった。

「ちっ、早すぎる！」

「その程度ですか？」

一度離れて落ち着かないと不味い・・・  
そう思いながらも、セイバーの剣の勢いは止まらない。  
くそっ、どうする？

（我を使え）

なんだ？頭の中で声が鳴り響く・・・

（G・Fを・・・）

その声を聴いた瞬間、体が軽くなった。

いままで、防ぐので精一杯だった、セイバーの剣を回避できるまでに

俺のスピードが上がった。

この出来事には、セイバーも驚いていた。

「加速した!？」

これで、セイバーとイーブンで戦えるようになったの  
だが・・・

いまいち打開策が見つからない。  
しかも、セイバーのスピードも上がってきているなん  
て、どれだけ

早いんだよ。

「はっ!!!」

俺は、セイバーの剣と俺の剣が交わる瞬間にライオン  
ハートの引き金を

引いた。

そうすると、セイバーの体は剣と一緒に壁際まで吹き  
飛んで行った。

セイバーは、剣を地面に突き刺して衝撃を抑えてはい  
たがあれはかなりの

ダメージのはずだ・・・

勝負あったな・・・

「まだです!!!」

おいおい、まだ立つのかよ・・・もういいだろ・・・  
セイバーが向かってくるも、よく見ると頭から出血し  
ていた。

それに、鎧も所々傷ついていて、もう力試しというレ

ベルの戦いでは

無かった。

「おい！もういいだろ！！！」

俺が、そういうもセイバーの耳に入ってはいなかった。  
セイバーが俺に切りかかろうとした瞬間、俺の目の前  
にG・Fの王が  
現れた。

「なっ……」

セイバーは、急停止し絶句していた。  
無論、俺もだ……

「……なんで、出てきたんだ！？」

そう、G・Fが出てくるには、ジャンクション中、つ  
まり装備中しか  
召喚できない。

「主が苦戦していたのでな」

だからって、勝手に出てくるなよ……  
そうこう話しているうちに道場に二人の人間がやって  
来た。

「どうしたんだ！？」

「あれは何！？」

もちろん、入ってきた人物とはこの家の家主の衛宮と  
俺のマスターである

凜であつた。

## 模擬戦（後書き）

戦闘シーン書くのって難しいですね・・・

書いてみて改めて実感させられました

話は変わりますが・・・

火曜日から学校の行事で長野県へ行くので

しばらく更新が出来ないかもしれません・・・  
すいません。

帰ってきたらドシドシ更新するのでご安心を！！！！  
では、ご意見・質問・アドバイスなどがあれば、  
お気軽にお申し付けください。

## 戦いの終わり（前書き）

期間がかなり開いてしまってますいませんでした。

「戦いの終わり」

始まります。

## 戦いの終わり

今、衛宮の道場の屋根をぶち抜いたG・F「バハムート」の  
ことについて

凜たちに説明しているところだ。

生憎、壊した屋根は凜の魔術で修理してもらった。

話がややこしくなるのでバハムートは戻している。

衛宮は、俺のことよりセイバーの方が心配のようで今は  
セイバーの怪我を

手当てしていた。

「実は、貴方つて結構凄い英霊なんじゃないの？」

凜が期待したような目で見てくる。

そんなに期待しないでくれ・・・対応に困る

「買いかぶりすぎだ・・・」

そう凜の期待を受け流して、自分が怪我をさせてしまっ  
たセイバーの方に  
向かった。

「大丈夫か？」

そう俺がセイバーに聞くと、衛宮が睨みつけて来た。  
まあ、そうくるよな・・・

「お前・・・ここまでやる必要はなかっただろ！」

衛宮はセイバーを傷つけられたことについてかなり怒っているようだ。

それを聞いていたセイバーが衛宮と俺の間に入って

「士郎、違うのです・・・スコールをそんなに責めないであげてください・・・」

セイバーは俺と衛宮の間で少し泣きそうな感じで俺を庇ってくれた・・・

なにか、男として大切なステータスが下がった気がした・・・

SEEDランクが1下がった

「むう、セイバーがそう言うなら、怒鳴って悪かった」

衛宮は納得はしていないものの申し訳なさそうに頭を下げてきた。

人に頭を下げられるのは好きじゃないんだがな・・・

「いや、気にしてないさ。俺も悪かったしな」

衛宮にそう言った後に、間に入っていたセイバーにも

「セイバーも悪かったな・・・それと・・・庇ってくれて・・・ありがとう」

そういえば、人にありがとうなんて言ったのは久しぶりだな・・・

そう言って俺は凜の元に戻った。

帰るなり凜がニヤニヤしながら

「貴方も結構かわいい所あるじゃない」

これは、からかわれているのか？褒められているのか？  
いや、きっとからかわれているんだな。

「悪かったな」

そう言っで、俺は道場を出た・・・

## 戦いの終わり（後書き）

スコール「何でこんなに遅れたんだ？」

作者「えっ・・・ちよつと、長野に」

スコール「一週間前に帰ってきたろ」

作者「いやゝ、テイルズ買ったちゃってさ」

スコール「・・・・・・・・・・」

作者「面白いじゃん？」

スコール「・・・・・・・・・・・・・・・・」

作者「ごめんなさい」

## 新展開（前書き）

お久しぶりです・・・

かなり、遅れてしまいましたね・・・

何故かって？

聞かないでください・・・

とにかく遅れて、すみません・・・

では「新展開」

はじまります・・・

## 新展開

「士郎、ちょっと話があるから来て」

凜が、士郎を呼ぶ

俺たちは、衛宮の夕飯を食べ今は、ゆっくりして  
いた。

「なんだ？遠坂」

そう聞き返しながら、士郎は俺の隣に座った・・・  
なぜ、俺の隣なのかって？

俺に聞くな！！！！

ちなみに、凜の隣にはセイバーが座っている・・・

ニヤニヤしながら

くそ、無性に腹が立つ・・・

何でだ？この感情って・・・確か、リノアとサイ

ファアの時の・・・

そうこう考えているうちに、凜と士郎の話が終わ  
ったようだ。

「あんだ、聞いてたの？」

凜が、俺の顔を覗き込んできた

「・・・ん？悪い、聞いてなかった」

俺がそう返すと、凜が若干怒った様子で

「もう！あんた勝つ気あんの！？まあ、いいわこれから私と士郎とで

偵察に行くことになったのよ」

「そうか・・・って、セイバーも行くのか？」

セイバーの傷は、決して浅くは無かったはずだ・

俺が、そう考えていると・・・

「私なら、大丈夫です。お気遣いありがとうございます。」

まあ、セイバーがそう言うなら大丈夫か？

「じゃあ、行きましょうか」

〵冬木の夜〵

すか？」

「スコール聞きたいことがあるのですがよろしいで

セイバーが、俺に話しかけてきた。  
凜と士郎は少し前にいる。

「なんだ？」

「私との戦いの時に、貴方の剣が爆発したように見えたのですか？」

本当によく見ているな・・・

「俺の武器はガンブレードと言って、銃と剣が合体したようなものなんだ

相手を切るときなどに引き金を引くと一時的に爆発的な攻撃力を発揮する  
ことが出来るんだ」

セイバーは、感心したように

「そうなのですが、変わったものなのですね」

俺とセイバーが色々話していると、目の前に黒いフードのようなものを

被った男が現れた

「・・・・・・・・・・」

男は黙っている・・・

それに痺れを切らした凜は、男に警戒しつつ

「貴方は一体何者？」

男は黙っている

次に士郎が

「なんで、黙ってるんだ・・・」

それでも男は黙っている

俺が、凜たちの前に立ちその男に向かって威嚇のつもりで切りかかった

しかし、相手の体は突然消えて、俺たちの後ろに立っていた。

「ちっ、お前の目的はなんだ？」

俺がそう問いかけると、男がゆっくりとくちを開いてこう言った

「・・・お前の・・・存在の・・・抹消・・・」

「なっ！？お前は一体・・・」

男はいきなり、光のような玉を出し俺たちを攻撃してきた。

「ちっ、一体なんなんだ！？」

士郎が毒付いていると  
凜が玉を避けながら

「知らないわよ・・・はっ！？」

男が凜の背後に現れて玉を命中させた。  
その瞬間、凜が消えた。

「凜！？」

「遠坂！？」

「このぉ！！！！」

俺は、男にきりかかったがガンブレードは空を切り、俺も玉の直撃を受けた

そして、冬木から姿を消した・・・

次に目を開けたときには、凜たちが倒れていた。

「スコール！目が覚めたんですね」

一番初めに目を覚ましたセイバーが話しかけてきた。  
た。

どうやら、セイバーもやられたみたいだった。

「ああ、セイバー此処は一体？」

ん？待てよ、此処は？まさか！！！！！！

「どうしたんですか？スコール」

セイバーが心配そうに問いかけて来るのも目に入らず俺はこう言った

「・・・バ・・・バラムガーデンだ！？」

## 新展開（後書き）

以上です……

展開はつや！！！！

聖杯どうすんのよ！？

まあ、どうにかなるさ？

スコール「Fate/nightの数少ないファンの方長い間お待たせ

した上、gggdですみません……、これからも応援よろしく願います。」

「ここで反省会（前書き）」

きょうはミニコーナーと言っ訳で

「ここで反省会」

始まります!!!

## ここらで反省会

「どうも、作者です!!! 本日は、F a t e / l i  
o n n i g h t の

ダメだし点を楽しいゲストの方と振り返って行きたい  
と思います」

「誰が楽しいゲストだ・・・早く本編を進めろよ」

「やだな」スコール君、勝手に出てきてもらっちゃあね  
」?

「お前の小説の反省点なんて挙げていたら限がないぞ」

「クールな顔して痛いトコ突いてくるね」。じゃあさ、  
スコール君が

思っ反省点って何処だと思う?」

「まず更新するのが遅すぎる!...!」

「はうあ、俺も忙しいんだよ、うん。」

「次に、頭が悪すぎる」

「ぐうつ、それは俺が真の力を発揮していないからさ」

「・・・顔が残念だ」

「ちよつ、てめえ、それは小説と関係ねえくだろお」が

「!!!」

「事実を言っただけだ」

「てめえ、アーチャーみたいな感じでしゃべりやがって・  
・そんなんで

クラウドに勝てるのかよ!!!」

「なつ、お前にそんなこと言われる筋合いは無い!!!  
第一、俺はイケメン度ならクラウドに負けてはいない

「!!!」

「んだよ、イケメン度だって？何だそれ？自分で言っ  
て恥ずかしくないの？」

「貴様……調子に乗るな、お前などこの刀の錆にして  
くれるわ……！」

「イメチェンしてんなよ……いいじゃん、表に出な」

「いいだろう……！」

「すみません……馬鹿ばかりで……此処からは私、  
セイバーが担当します」

「あと、俺も居るぞ。あつ、俺の名前は……衛宮士郎  
だ」

「まずは、スコールのクラスの名前が残念」

「ああ、ガンブレードねえ無いわ」

「士郎、キャラ変わりましたね」

「そうか？まあ気にすんな。」

「そうですか・・・では、気を取り直して行きましょう。  
理由は、単純明快です。作者の頭が回りませんでした  
」

「あいつ、馬鹿だからな」

「それでは、次は・・・」

「えっ、ちょっ、それだけ？反省してないじゃないか！

」？

「えー」

「えー、とか言われてもこっちが「えー」だよ！！！」

「しょうがないですね・・・多分その時は深夜だったの  
でしょう。」

「だから、今後からは集中力があるときに書きます」

「まあ、それでいいだろう」

「次は、話の展開が速い」

「うん、まあ、最もな意見だな。」

「では、お答えします!!!」

この前言ったとおり、原作とはかけ離れますので大丈夫です。」

「みんな、安心してくれよな!!!」

「では、最後に改行が残念」

「うん、的確な意見だ。」

「では、お答えします!!!」

確かにこれまでは何も考えずに文字を打っているだけでした。

しかし、これからは皆さんのことも考えながら打つので大丈夫です!!!」

「これで、反省会は終わりだ。

至らぬ点があるかも知れないが、みんなが応援してく

れる限り作者は頑張れる

「これからも応援よろしくな！！！」

「・・・・・・では、また本編で」  
「  
「  
「

## ここらで反省会（後書き）

小説も難しいけど、ミニコーナーも難しいよ

こんな作者だからこそ言います。

アドバイスなどこれからもよろしくお願いします！！！

n e w w o r l d (前書き)

おしさしぶりです。

それでは、「new world」

始まります!!!

「ねえ、スコール此処は何処なの？それに、バラム  
ガーデンって？」

凜が心配そうに俺に話しかけてきた。

後ろのセイバーと衛宮も心配そうにしている。

俺も正直、不満でたまらないが皆を安心させるため  
に。

出来るだけ、俺の中の精一杯の優しい顔を試みた。

「うん？ああ、俺が英霊に成る前まで居た場所だ（  
にっ）」

俺だってこれくらいのことは出来るんだ。

「・・・えっ、ああ～そうなんだ～。あははは～」

凜の顔が少し赤い。

それに、様子も少しおかしい。

良く見ると、後ろに居るセイバーもだ・・・どうし  
てだ？

「どうしたんだ？」

俺がそう聞き返すと凜は慌てた様子で

「えっ、べっ別に・・・何も無いわよ。・・・カッコ  
いいだなんて思っ

無いんだから・・・。」

「そうか。」

何か、小声で何か聞こえたがあえて聞き流すことにした。

何故かって？

それは、きっと俺の顔を見て面白がっているに違いないからさ・・・。

「って・・・えっ？貴方が居た世界？」

急に態度を変え、俺の方に向き直ってくる凜。

「そうだ。因みに原因はさっきの黒い奴だと思っぞ」

俺がそう言っつて、凜は納得したように見えたが。

「原因は分かるけど・・・。此処は私たちの住んでいる地球とは思えない

いんだけど。」

「ん？何故だ？」

俺が凜にたずね返してみると、凜が呆れた顔で後ろを指を指していた。

その方向を見て見ると、そこにはモンスターが居た

！！！！

・。

そう、セイバーと戯れている『コヨコヨ』が居た・。



## n e w w o r l d (後書き)

どうでしたか？

非常に短いような？。

すいません！！！！

次からは出来るだけ早く更新します。

次回からは、バラムガーデンへ行く予定なので。

よろしく願います。

## ミサイル（前書き）

長らくお待ちして申し訳ございません。

「ミサイル」

始まります。

## ミサイル

「なにやってんだセイバー？」

少しと言うか、かなり呆れ気味の衛宮がセイバーに問いかける。

その問いかけにかなり焦り気味のセイバー。

「ふえ？・・はっ！！すみません、私としたことが  
！！！」

顔を真っ赤にして口をアワアワしているセイバーのことを不覚にも

可愛いと思ってしまったのは秘密だ。  
何気に衛宮も顔が赤い。

「大丈夫だよ、そいつは安全なモンスターだから」

そう俺が言つと凜が不思議な顔をした。  
俺なにか変なこと言ったか？  
俺がそう思っていると衛宮が口を開いた。

「モンスター？」

ああ、そうか衛宮たちはモンスターなんて知らなかったな。

「そうだ、俺の元いた世界にはモンスターが存在する。モンスターの

ないやつなんか

中には凶暴な奴やらコヨコヨみたいによく分らないいろいろな奴が存在する。」

って進んできた。

俺が説明している途中に一台の車が俺たちに向かってあの車は・・・ガルバディア！

「なんなの？あの車は」

凜が俺に説明を求めてくる。

他の二人も凜と同じような顔をしている。

「説明は後でする」

俺は簡単に答えを返した。

った。

（ガルバディアが攻撃してくるなら、どうする？）  
などと俺が考えていると、車は俺たちの前で止ま  
そうして車の窓から一人の男が顔を出してきた。

「おい、ここに居たらあぶねえぞ」

男が慌てている様子だ。

凜が男にその理由を問いかけてみた。

「なんで、危ないの？」

「なんでって・・・しらねえのかよ!？」

でも兵士か？

的確に素早く聞かれている事だけを答えろ、それなど心の中で俺は思っていた。

しかし、次の瞬間この男が言ったことに俺は耳を疑った。

「バラムにミサイルが発射されんだよ！」

そんな馬鹿な！？

この時の俺は冷静さを失っていたと思う。

「一体いつそれは発射されるんだ！？」

俺の勢いに負けたのか男は驚きながら。

「正確な時間はわからねえが今日の内つてのは間違

いねえよ」

「ちっ」

俺は舌打ちをするとその場を駆け出した。  
そうしたら凜がそれを制するように

「ちよっ！何処行くのよ！？」

「バラムガーデンだ！！！」

そう言うと凜を振り切って俺はバラムガーデンに  
向けて駆け出していた。

### ミサイル（後書き）

すいませんでした。

PCに麦茶をこぼしてしまいました。

PCオワタみたいな感じになりました。

今回みたいな失態は申しませんので、私を見捨てないで！

！！

## 再開（前書き）

さてさて始めました。

F a t e / l i o n   n i g h t   「再開」

お楽しみください。

## 再開

俺たちは走っていた。

何故かって？バラムガーデンにミサイルが向かっているからさ。

なんて事を考えている場合じゃないな。

などと考えていたら、隣に凜と衛宮を背負ってセイバーが追いついてきた。

「待つてくださいスコール！」

セイバーは俺を呼んでいるが俺の耳には入ってこなかった。  
俺が走る速度を更に上げると前から見知った顔が走ってきた。

「えっ？ええ〜〜〜〜！？あれスコールじゃねえか！？」

その声の主がこちらに向けて走ってきた。

あの声はまさか！？

俺は驚きその場に立ち止まってしまった。

「なんでお前が此処にいるんだ？まさか…………おばけ？」

そんなわけ…………あるのか、俺はこの世界では死んだんだからな。  
改めて実感させられるな。しかし、俺は何で死んだんだ？いつ死んだんだ？

ちっ、この世界に来てから記憶に靄がかかっているみたいだ…………。

「おゝい、スコール…………それとも妖怪？」

「お前は相変わらずだな、ゼル？」

ゼルの間抜けな質問で落ち着くなんて俺もまだまだだな。  
俺が皮肉交じりの回答を返すとゼルは一気に笑った。

「マジでスコールだ！！生きてたのか、よかったってそれどころじゃないんだ！！！」

「ミサイルがバラムガーデンに向かつてるだろ？落ち着けよ。」

俺がそう言つと、ゼルは落ち着きを取り戻した。

「そ、そうだな」

俺とゼルが話していると、セイバーたちが追いついてきた。

「スコール待つてください・・・貴様何者だ！？」

セイバーはゼルを見るなり見えない剣をゼルに向けた。  
何故かって？・・・まあ、ゼルだからな。  
対し剣を向けられたゼルはというと。

「えっ、ちょっ、なんだ！？」

ものすごく焦っていた。

このまま焦るゼルを見ているのも良いが、セイバーの後ろにいる凛の目が恐ろしい。

話を進めたほうが良さそうだな。

「セイバーこいつは大丈夫だ。俺の仲間だ。」

俺がそう言つと、セイバーは剣をしまった。  
凜や衛宮も警戒を解いたみたいだ。

「そうでしたか。ご無礼をお許しください。」

凜がゼルに謝つたのだが、なにか言葉使いが丁寧すぎる。  
普段もそうして欲しいものだな。

「お、おう！ 気にしてないから大丈夫だ。」

「ゼル、すまないがバラムガーデンへ行くぞ！」

俺はゼルにそう言つとバラムガーデンへ走っていった。

## 再開（後書き）

どんだけバラムガーデン遠いんだよ（笑）

次回こそバラムガーデンです。

感想・指摘などがありましたらお気軽にお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8119p/>

---

Fate/lion night

2011年11月28日01時47分発行